
黒髪ロングの美少女を、存在証明

ym_640

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒髪ロングの美少女を、存在証明

【Nコード】

N0881Z

【作者名】

ym640

【あらすじ】

浪人生の亮の部屋に、突然、黒髪ロングの美少女が現れた。だが、この少女は、亮にしか見えない。何をするでもなく、ただ亮の周りをつきまとう少女は一体何者？ 少女は亮の妄想の産物？ 亮は少女の存在証明を計ろうと動き始める。

「フウ……」

新田亮はそう吐息を漏らすと、机の上の参考書を閉じた。四月の午後の陽光は、カーテンを閉め切った部屋を照らす事もなく、机の上のデスクスタンドだけが部屋の中をボンヤリと浮き上がらせていた。

「そろそろか……」

亮はそう呟くと、ベッドの枕元にある棚に目をやった。棚の上には小学生の頃から使い続けている黒い目覚まし時計が置いてあり、その短針と長針は、丁度、午後四時を指し示そうとしていた。亮は部屋の中を、家具の配置を確かめるかの様に見回した。

玄関のドアが勢いよく開けられる音がした。尋常ではない音が響き渡る。

そのまま玄関に飛び込み、正面の階段を駆け上ってくる音が聞こえる。来訪者の足音は、まるで映画でよく見る、犯罪現場へ突入する刑事達の足音のようだ。

響き渡る足音が、部屋の前までやって来る。

「来たな……！」

亮がそう呟いた瞬間、部屋のドアが開けられた。

「亮君、勉強してるーっ!？」

部屋の中に、甲高い声が響き渡った。

「勉強してると思うんなら、静かにするんだな」

「うわっ、相変わらず薄暗い部屋だねーっ!」

部屋のドアを開け放った闖入者は、亮の言葉を聞く様子もなく窓に近寄り、勢いよくカーテンを開け放った。

「うっ……!」

「ほらほら、部屋の空気も入れ替えなさいよーっ!」

開け放たれたカーテンからの光に、亮は目に付き刺さる光を右手

で遮った。だが闖入者は、その様子を気に掛ける風もなく今度は窓を開け放った。

「暗い方が集中できるんだ……！」

「本当、世話が掛かるんだからっ！」

闖入者はそう言っていると、ベッドまで走り寄って飛び跳ねると、ベッドにドスンとお尻から着地した。

「加奈、学校は終わったのか……？」

「うん、部活も日曜日に練習試合あったから今日は休み」

加奈と呼ばれた少女はそう答えた。

「だったら真っ直ぐ家に帰ったらどうなんだ？ それに、せっかく部活も休みなのなら、友達と遊びに行ったりした方が、有意義な放課後の過ごし方なんじゃないのか？」

亮の言葉に、加奈は人差し指を顎に当て、暫く考え込むような素振りを見せた。

「だって、叔父さんも叔母さんも今日帰ってこないんだし、誰か亮君のお世話しなくちゃならないでしょ？」

「必要ない。さっさと家に帰るんだな」

「ヒドイッ！ 何、その言い草っ！」

加奈はそう叫ぶと、そのまま勢いよくベッドに倒れこんだ。加奈の着ているジャンパースカートの、紺色の制服のスカートがヒラリと翻った。

「今日、何食べたい？」

倒れこんだ勢いそのままに起き上がると、加奈は満面の笑顔を浮かべてそう尋ねた。

「必要ないと言ったはずだ」

「現役的女子中学生がご飯作ってくれるんだよっ！ JCだよっ！素直に喜びなさいっ！」

加奈はそう言っていると、右手の人差し指を伸ばして、椅子に座ったままの亮のおでこをチョンと突付いた。

「お前……、学校でもそんな調子なのか……！？」

加奈に突かれたおでこを摩りながら、亮はそう言った。

「うんっ、加奈は元気が有り過ぎるって、友達にも先生にも言われるよっ！」

舌を出し、握った拳で自分の頭をコツンと叩きながら加奈はそう言った。

「そうか……」

亮は一言だけそう呟いた。《こんな一昔のラブコメ漫画みたいな反応をする同級生を、クラスの他の生徒はどう思っているのだろう……》呟いた後に亮はそう思った。《加奈はこの若さで、どここんな昔のラブコメのパターンを覚えたのだろう。いや、モダン、ポストモダンの繰り返しのように、一昔と思っているパターンが、今の主流として盛り返しているのだろうか？　だが、問題の本質はそこではない。ラブコメのパターンを刷り込まれ、それを日常生活で発露してしまう事が問題なのだ。そして、この人物が僕の従妹だという事が問題なのだ！　これが現代社会の、虚構と現実との境界がはつきりしなくなっているという事なのだろうか？　しかし……。しかし、加奈のこの行動が、如何なる媒体からも影響を受ける事無く、本人そのものから現れ出たものなのだとしたら！　それは、パターンとしての行動ではなく、加奈の本質を表す行動という事になってしまうのではないだろうか……？》亮は、そこまで考えてから、考えるのを止めた。

「今日、何食べたい？」

「必要ない」

「現役的女子中学生が……」

「そもそも、お前料理出来ないだろうっ！　バーモントカレー作るのに、何であんなに水っぽくなるんだっ！」

亮の叫び声が響き渡った瞬間、加奈の表情が凍りついた。そのうちに、加奈の両目にはじわじわと光るものが広がり始め、その途端、加奈は両手で顔を覆いベッドに勢いよく突っ伏した。

「ヒドイッ！　酷すぎるっ！」

ベッドの上の枕に顔を埋めながら、そう叫ぶ加奈の様子を、亮は苦々しい表情で見詰め続けていた。この、一々見覚えのある行動パターンを加奈が示す度に、亮は言い様のない苛立ちと、気恥ずかしさを感じてしまうのだった。だが、どんなに亮が苛立ちを覚え叱責しようとも、加奈は自分の行動を省みる事はなく、また、自分から謝罪する事はない事を、亮はこれまでの経験から既に知り尽くしていた。

「言い方がきつかったようだ……」

枕に顔を埋めたままの加奈に、出来るだけ優しい声色で亮は囁きかけた。ピンク色の髪ゴムで、肩口まで伸びた髪を二つに纏めている、加奈の首筋がピクリと反応するのを察した。

「せっかく作って貰った料理に文句を言うのは、間違っていた気がする……」

加奈が、枕から顔をずらして視線を亮に向けた。

「いや、僕が間違っていたよ」

亮がそう言った瞬間、加奈は非常な素早さで跳ね起きる、亮の目の前で力強く床を踏みしめてこう言った。

「もう、本当だよっ！ 今度、作ってあげた料理に文句を言ったら、二度とご飯作ってあげないんだからっ！」

加奈はそう言うと、プーツと頬を膨らませた。《何ていう事だ……》亮は、加奈のその表情を眺めながらそう思った。《作ってくれなどと一度も言った事が無いにも拘らずこの言い草……。そして、自分の料理が失敗だった事など微塵も反省していない。第一に、料理なら自分の方が、一人で夜食を作るなどして経験が豊富はずだ。いや、確実に加奈のような、水っぽいカレーを作ってしまう事など万に一つも無いだろう！ それにも拘らず……。確実に自分の方が料理が得意なはずなのだ。そして、あの頬を膨らませる様子の気恥ずかしさときたら！》

「それじゃあ、リクエストにお答えして、夕食はカレーに……」
「遠慮しておくよ」

「遠慮しなくていいってば」

「言葉どおりに受け取るんじゃない。……それに、あの事を気にしての行動だったら、余計な気を使う必要はないんだぞ。あれは単なる事故だ」

亮がそう言つて、加奈の顔に視線を向けると、加奈はその視線を避けるように目を逸らし『別に、そういう訳じゃない……』と小さく呟いた。

「それから、さっき泣いた振りをしてベッドに倒れこんだ時、色々と手を伸ばして探っていたようだが何も出てくるものは無いぞ」

亮のその言葉に、加奈は『えっ……！？』と思わず声を漏らした。「僕だつて年頃の男子だ。異性に興味を持つ事は不思議な事ではない。だが、自分の性的趣向を他人に知られるのはゴメンだ。ましてや、女子中学生の従妹とくれば尚更だ」

「えっ……！？」

「それからお前、僕が部屋に居ない時に黙つてこの部屋に入っているだろう？ 僕にも父親の書棚を漁ったり、友達と河川敷に落ちている本を集めた経験がある。だが、他人の部屋に黙つて入ることは良くない事なんだぞ」

「い、意味解んないんですけど……！」

加奈は、目を逸らしたままそう呟いた。しかし、加奈の頬に強い赤みが広がっているのが、それまでの加奈とは明らかに違う点だった。

「確かに、女子中学生が男子と同じ様な性的興味を抱くのかは僕にも解らない。だが、思春期になれば、異性に興味を持ち始めるのはおかしい事ではない。だが、言いにくい事だが……。恥ずかしながら、僕が持っている雑誌や映像媒体は、女子中学生に相応しいものだとは思えない。友人から借りた、僕が見ても特殊と言わざるをえない作品もある事だしな。だから、加奈にはもっと健全な……。うん、どうした加奈？」

言葉が続けながら亮は、加奈の様子がそれまでと違っている事に

気付いた。目を逸らし続けているのはそのままだが、身体が小刻みに震え、頬の赤みは、まるで熱病に罹ったかのような赤みを帯びていた。

「い、意味解ないんですけど……！」

加奈は絞り出すような声でそう言った。

「加奈……！？」

「意味解ないんですけどっ！ 全然、意味解ないんですけどっ！ ちょー意味解ないんですけどっ！」

加奈はそう叫ぶと、ベッドの上の枕を掴み取り、勢いよく亮の顔面に投げつけると、そのまま入って来た時の勢いの、ゆうに倍はある勢いで部屋のドアを飛び出し、その勢いを落とす事無く階段を駆け下りて行った。玄関のドアが勢いよく開けられ、そして激しく閉じた音を聞き遂げると、亮はゆっくりと椅子から立ち上がり、加奈に投げつけられた枕を床から拾い上げた。《意味が解らないだ……》亮は枕を拾いながら思った。《思春期の心情を汲んで遠まわしに言ってるやっていると！ 意味が解らないのは、他人の部屋に忍び込んで、その痕跡を隠す事も無く、それにも拘らず指摘される事を想像しないお前の方だ！ 亮は憤りを隠し切れずにそう思った。とは言え……。中学生という多感な時期に、それも女子に対して、性的嗜好の注意を面と向かって行うのは些かデリカシーに欠けたか。だが……。今日はどうしても、部屋に居られると困る事情があるのだ》

「出て来い、僕の妄想」

拾った枕をベッドの上に放りながら、ベッドの下の空間に向かって亮はそう言った。わざとシーツを布団にたくし込まずにいたシーツは、床に触れるかの程に垂れ下がっていた。

「出て来い」

もう一度、亮がベッドの下に向かってそう言っていると、垂れ下がっていたシーツに変化が起こり始めた。ジリジリと垂れ下がっていたシーツが、僅かにこちら側に向かって膨らみ始め、その膨らみは僅か

ずつではあるが膨張し続けていた。そして、明らかにその膨らみが目視できる大きさまで膨張すると、途端に垂れ下がっていたシーツを跳ね上がらせる勢いで、なにものかの物体が転がり出てきた。その物体は、亮の目の前でゆっくりと、丸まった状態から展開を始めた。亮はその様子を、それまでとは違う真剣な表情で睨み続けた。

その物体は展開を終えると、ゆっくりと上体を持ち上げ始めた。

その物体は人間の形状をしていた。両足と認識出来るものを伸ばしながら、また、両手と認識出来るものを床に着いて、ゆっくりと上体を起こしていく。その上体には、頭部と認識出来るものが鎮座しており、頭髪と見受けられるものが長く伸びていた。亮は、その物体に近寄り、ゆっくりと右手を伸ばし始めた。《正体を暴いてやる、僕の妄想……！》亮の伸ばした右手は、もうすぐその物体に触れる所まで近付いていた。

「何をしているんですかつ！」

「グハッ！」

人間の形をした物体が大音声を発しながら、右手と思しき部分の平手と認識出来る部分で亮の左頬を打ちつけた。その瞬間、亮の身体は吹き飛ばされる様にして床に転がった。

「何処を触ろうとしているんですかつ！」

人間の形をした物体はそう叫びながら、両腕で自分の胸部を隠すようにすると、亮から身を守るように背中を向けた。この人間の形をした物体は、まさに人間の姿をしていた。年齢は十代前半から半ば。性別は女性。体長の大きさを、人間の女性で十四歳の加奈と比較してもそれ程の差異はないだろう。服装は古風ともいえる白いセーラー服。胸元に巻いた赤いスカーフと、膝下まで隠れるスカートは、まるで一昔前の女子学生を思い起こさせた。何より、眉上で切り揃えられた前髪と、腰まで伸びている長い黒髪は、真っ白な肌と対比して、一昔どころか二昔以上前の、女子学生の印象を亮に与えていた。

「悪かったよ……」

亮はそう言っ、打ちつけられた左頬を擦りながら、立ち上がり椅子に腰を下ろした。

「謝って済む問題じゃありませんっ！　突然、乙女の、む、胸に手を……！」

「ちよつと、ベッドの上の枕を取ってくれないか？」

「む、胸を……、えっ？　はい、どうぞ」

人間の形をした物体はそう言いながら、亮に背中を向け、ベッドの上の枕に手を伸ばした。《今だっ！》亮は心の中でそう叫んだ。座っていた椅子から勢いよく立ち上がると、背中を向けている人間の形をした物体に飛び掛った。亮の両腕が、人間の形をした物体の身体を取り押さえようとした瞬間……。亮の身体は、人間の形をした物体の身体をすり抜け、ベッドの上に勢いよく飛び込む格好になつていた。

「き……、ギャーッ！」

ベッドにうつ伏せの格好で身を投げ出したまま、亮は背後からそう叫び声が聞いた。《一体どういう事なんだ……！》亮は、叫び声を聞きながそう思った。《奴は僕の身体に触れる事が出来た。この左頬の痛みが何よりの証拠だ！》亮はそう思いながら、まだジンジンと痛みを感じる左頬に左手を当てた。《だが……。だが、僕は奴の身体に触れる事は出来なかった！　これは全て僕の妄想なのか！　奴の身体に触れる事が出来ない、その一つの事象で、全て僕の妄想だという事を立証しているのか！？》

「こ、このケダモノっ……！　破廉恥漢っ！」

背後から聞こえる叫び声を聞きながら、亮は後頭部をいつの間にか取り上げられた枕で、バシバシと打ち付けられるのを感じた。《そしてこの事象……！》亮は、打ち付けられる枕から、頭部を両腕で庇いながらそう思った。《僕は奴に触れる事は出来ない。だが、奴は僕に触れる事が出来て、尚且つ、その他の物体にも触れる事が出来る。この枕で打ち付けられる痛みまで僕の妄想だというのは……！》枕を打ち付けられる間、亮はずっとその事を考え続けながら耐えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0881z/>

黒髪ロングの美少女を、存在証明

2011年12月3日18時57分発行